

展望

童謡・唱歌のノスタルジーと短歌 三沢左右

姫路文学館で開催されていた企画展「没後40年記念 歌人安田青風展」を見た。青風は姫路ゆかりの歌人で、歌誌「白珠」を創刊した。子に章生、孫に純生（章生の甥・現「白珠」代表）がいる。会場頒布の資料からの孫引きで恐縮だが、作品を三首挙げる。

ほかほかと冬日でれるにまがなしく思ひ
出せり汝がつぶら眼を 『春鳥』

運命を買ひ足すことも出来ないが冬日の
ぬきき道いそぎゆく 『遍歴者』

すみれ咲く畦 肉厚き母の膝 一瞬にし
て老いたり我は 『立岡山』

十代半ばから作歌を始めただけあり、堂々たる正調の歌を詠む作者だが、歌風の幅は広い。私はどちらかというと後年の肩の力が抜けた歌に魅力を感じた。

会場で歌集は販売されておらず、後日図書館で第一歌集『春鳥』の収録された『現代短歌全集 第七巻』（筑摩書房）を借りた。作者の手による巻末附記には、交流のあった先達として前田夕暮、斎藤茂吉、小泉千樫、三木露風、山村暮鳥、室生犀星、萩原朔太郎と、

錚々たる人物が並ぶ。交通や連絡の便も現代より未発達な時代、郵便による濃やかな詩精神の交流が想像される。詩形を超えた交友関係が作品に幅を与えたのだろう。

話は変わって昨年出版された三枝昂之『夏は来ぬ 詩歌を楽しむ』。二〇一三年に出版されたものの文庫化で、百編を超える詩歌の鑑賞を収録する。俳句、古典和歌やJポップなど、取り上げる作品は多岐にわたるが、歌人である三枝の鑑賞には、常に短歌の抒情が感じられる。その中で、童謡や唱歌の鑑賞に印象的なものが多かった。童謡や唱歌の詞には、詩人のノスタルジーがこもることを三枝は指摘する。

夕やけ小やけの 赤とんぼ

とまっているよ 竿の先

からたちの花が咲いたよ

白い 白い 花が咲いたよ

露風の作品について三枝は、露風十四歳の

ときの俳句（赤とんぼとまっているよ竿の

先）を引き、「どうも詩人歌人は自分の原風

景から離れることが出来ないらしい」と結ぶ。

白秋の作品については展開の巧みさと色彩の豊かさを述べた上で、五番の歌詞（からたちのそばで泣いたよ／みんな みんな やさしかったよ）に表れる郷愁を指摘する。

安田青風の短歌に表現される郷土愛や郷愁を読むと、私はこれらの童謡や唱歌に近い風味を感じる。たとえば前出の「すみれ咲く畦」の一首に見られる端的で視覚的な回想の無造作な提示。しかしその景を短歌的な詩情に引き寄せるのは、「一瞬にして老いたり我は」という下の句だ。喪失感を詠うことにより、郷土の原風景は逆説的にかげがえのないものとして輝き出す。

想像になるが、露風らとの交流の中で青風は童謡や唱歌の詞のエッセンスを吸収したのではないだろうか。ただ、青風の核にはやはり、郷土への愛と短歌という詩形があった。

私自身の作歌を省みると、いかに他ジャンルの詩に無頓着であるか。そしてそれは、短歌という詩形への無頓着でもある。インターネットなどが発達した現代、私たちは短歌を通じて時、場所、相手を選ばずに交流できる。しかし同時に、他の詩形との交流と、それを通じて自身の短歌を深める機会を失っているようにも感じる。短歌の豊かさの根源にあるものが何なのか、いま一度見つめ直したい。